

佐佐木頼綱の歌 田中拓也

- ・ 娶りしもの娶られしもの嗚呼 Mexico 『日西辞典』しづかに開く
- ・ 新妻の細き横髪揺らしめて太平洋鉄道車窓の土臭き風
- ・ 過ぎてゆく景色の中のロバの荷に赤き林檎は列をなしたり
- ・ 第二十八回歌壇賞を受賞した佐佐木頼綱の「風に膨らむ地図」は「旅」を詠んだ新鮮な力作であった。「新妻」とのメキシコの旅はいわゆる新婚旅行のイメージからは遠く離れている。
- ・ ゆつくりと我の論理を変へながら読み継ぐ『メキシコ革命史』を
- ・ パンチョなる元山賊が出でてきてよく殺しよく結婚をする
- ・ 「旅」は日常の「我」を少しずつ変えていく場でもある。アステカ帝国の繁栄、スペイン植民地時代の悲劇、独立と革命の近代以降の歴史を持つメキシコには作者のアイデンティティーを変え何かがあったのだろう。「パンチョなる元山賊」「よく殺しよく結婚をする」という非日常の語彙が作者自身の変化を象徴するフレーズとなっている。
- ・ 山賊の思想だらうか午後の陽に峡谷の尾根麗しく見ゆ
- ・ 雪残るアステカの山を撮り終へて妻のライカはまばゆさを増す
- ・ 連作の中心となる秀歌であるとともに、作者の作品世界の一つの到達地点となる二首と思う。体制に縛られない「山賊の思想」のシンボルとして描写されるのは「峡谷の尾根」である。そして、

その尾根を「麗しく見ゆ」と表現した結句からは独自の美学を読み取ることができる。「雪残る」の作品で描かれている「妻」は配偶者というよりも「同志」とも呼ぶべき存在としてうたわれており、人生を共に生きることの喜びがシャープに表現されている。

・ 広げれば風に膨らむ地図を抱き闘牛観賞バスに乗りゆく

・ 闘牛の勇氣の歴史を半時間聞ける黄色人種の後ろ手
受賞作の表題歌となった「闘牛」を詠んだ作品。「闘牛」はスペイン発祥の競技であり、今では現地の観光資源の一つとなっているものであろう。しかし、「闘牛」をもたらししたスペインはメキシコを植民地として支配していた歴史を持つ。作者は「黄色人種の後ろ手」を描写することによって「闘牛」の持つ重層的な意味を浮かび上げようとしている。

・ 少しづつ我らは生まれ変はりなむ待合室に孔雀草散る

・ いくつかで我らの生死とつながれる椰子の実の陽に焼けたる匂ひ

最後に「我ら」を詠んだ二首を挙げたい。「我ら」の解釈には幅があるが、あえて夫婦と理解することによって、この作品には独特な意味が生まれてくると思う。作者は夫婦の「生まれ変はり」の場として、そして、「生死」につながる場として「旅」を力強くうたいあげている。そこから読み取ることができるのは自身の「生」への決意とともに、妻となる者への力強い「愛」の表明であるともいえよう。

新人賞としては異色の受賞作といえるが、異色なものを新しい時代を生み出す原動力となると思う。佐佐木頼綱の受賞作を読みつつ、これからの新しい短歌史を想像した。